

「日本の美」総合プロジェクト懇談会（第4回）

ジャポニスム2018総合推進会議（第1回）

議 事 要 旨

○日 時：平成28年11月24日（木）17：30～18：49

○場 所：官邸2階小ホール

○有識者：津川座長（総括主査）、内永委員、幸田委員、小林委員、林委員、

○政府等：安倍内閣総理大臣（議長）、岸田外務大臣、松野文部科学大臣、
野上内閣官房副長官（議長補佐）、河井総理大臣補佐官、
兼原内閣官房副長官補、宮田文化庁長官、中岡文化庁次長、
下川外務省国際文化交流審議官、安藤国際交流基金理事長（主査）

1 開 会

2 総理挨拶

3 議 事

（1）イタリア「日本仏像展」の開催結果について

（2）ジャポニスム2018の経緯等について

（3）ジャポニスム2018のタイトル、コンセプト、開催時期等について

（4）ジャポニスム2018の企画案の検討状況について

（5）意見交換

4 閉 会

（司会：野上内閣官房副長官）

1. 開会

2. 総理大臣挨拶

冒頭、安倍内閣総理大臣より、以下のとおり挨拶があった。

我が国には、世界に誇る文化芸術がある。津川座長からは、このすばらしさを世界に発信し、外交に活かしていこうという御提案をいただき、本懇談会を設置した。委員の方々のお話を伺うほどに、私自身、日本の文化芸術は、日本と世界をつなげる大きな力を秘めている。そのことを強く感じ、その可能性に

わくわくさせられる思いである。

このような中で、2018年を迎える。2018年は、明治維新150周年、日仏友好160周年の節目の年である。この節目の年に、本懇談会で芽生えた「文化外交」をスタートさせることを考えた。

このため、本年5月の日仏首脳会談において、文化の都パリを中心に今世紀最大規模の日本文化の発信事業を実施することについて、オランダ大統領に提案し、賛同をいただいた。

それが「ジャポニスム2018」である。この取組は、世界に誇る日本の文化の力で日本の存在感を高めようとする、政府の意気込みのあらわれであり、安倍内閣の柱の一つになるものと考えている。

ここでは、歌舞伎や能、文楽、雅楽などの伝統文化から、現代の演劇や美術、あるいは初音ミクの踊るコンサートやマンガ・アニメ展、日本映画の回顧上映等幅広く紹介する。また、最近日本でも人気を博した若冲展あるいは琳派展や、日本文化の原点とも言うべき縄文展についても実施すべく追求中である。

また、2020年にはオリンピック・パラリンピック東京大会が控えている。世界中の人々の目が注がれるこの大会に向けて、日本に関心を向けてくれるよう、21世紀のジャポニスム旋風を巻き起こす決意である。フランス政府からは、この機会における私への招待をいただいております、私としても、事情が許せば、ぜひ、現地から、本企画を盛り上げていきたいと考えている。

この新しい取組を成功させるには、オールジャパンでの取組が必要である。「ジャポニスム2018」について、官民が協力して、効果的かつ効率的に開催できるよう、本日ここに「ジャポニスム2018総合推進会議」を設置する。

委員の皆様には「ジャポニスム2018」の成功に向けて、懇談会及び総合推進会議の委員として、忌憚のない御意見をいただきたい。御協力をよろしく願いしたい。

(報道関係者退室)

次に、野上副長官から、以下のとおり説明があった。

○本懇談会において委員の皆様から御提案いただいた「日本博」については、2018年にフランスで「ジャポニスム2018」として開催することになった。

- ジャポニスム2018の成功のためには、内外交渉、広報など多岐にわたる活動が必要になる。このため、内閣官房、外務省、文化庁、国際交流基金などの関係省庁等が一体となって取り組むことが必要である。
- また、民間の発想や視点をいただきながら、広く国内外に共感してもらえるものとする必要がある。官民が一体となって進めることで、効果的で、効率的な開催が可能となるものと考えている。このため、ジャポニスム2018のエンジンともなる「ジャポニスム2018総合推進会議」について、総理大臣を議長として本日設置し、第1回会議を開催することとしたい。
- 委員の皆様方には、引き続き、総合推進会議にも御参加をいただき、御意見を頂戴したいと考えており、御協力のほどよろしくお願いしたい。
- 総合推進会議の公開・非公開の扱いや資料の取扱い等については、資料1のとおり、「日本の美」総合プロジェクト懇談会と同じ扱いとしたいので御了承願いたい。

3. 議事

(1) イタリア「日本仏像展」の開催結果について

次に、宮田文化庁長官より、資料2に基づき、イタリアで開催した「日本仏像展」の開催結果について、説明があった。

(2) ジャポニスム2018の経緯等について

次に、松永内閣審議官より、資料3～5に基づき、ジャポニスム2018の経緯等について説明があった。

(3) ジャポニスム2018のタイトル、コンセプト、開催時期等について

次に、下川外務省国際文化交流審議官より、資料6～8に基づき、ジャポニスム2018のタイトル、コンセプト、開催時期等について説明があった。

(4) ジャポニスム2018の企画案の検討状況について

次に、安藤国際交流基金理事長より、資料9に基づき、ジャポニスム2018の企画案の検討状況について説明があった。

(5) 意見交換

意見交換のはじめに、岸田外務大臣より、以下のとおり、ジャポニスム2018の所管大臣としての発言があった。

【岸田外務大臣】

- ジャポニスム2018の企画を通じて、フランスはもとより、世界中の人々に日本の魅力を実感していただき、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会にもつなげていきたい。
- 2018年は日仏友好160周年に当たる。この節目に日仏がともに歩んできた歴史を振り返りつつ、21世紀の国際社会が直面している新たな課題にともに対処していくためのヒントを生み出すような交流が行われることを期待している。
- 委員の皆様方には、企画の成功に向けて貴重な御助言をいただくことを、心からお願い申し上げます。

次に、各委員等による意見交換が行われた。主な発言は以下のとおり。

【津川座長（総括主査）】

- 日本は伝統文化をはじめ、現代文化においても誇り高き「文化大国」である。これを世界に知らしめることが「日本の美」総合プロジェクトの活動の意義だと思う。

10年前の第1次安倍内閣で、総理はこうおっしゃっている。「美しい国日本の魅力を世界にアピールすることは重要です。未来に向けた新しい日本のカントリーアイデンティティ、即ち我が国の理念、目指すべき方向、日本らしさを世界に発信していくことが、これからの日本にとって極めて重要なことでもあります。国家としての対外広報を、我が国の英知を集めて戦略的に実施しなければなりません」と。

「文化による広報外交」が大切だとの理念を持つ安倍内閣のもと、今こそ日本文化の魅力を世界に伝達する絶好の機会である。

- 日本は世界に類を見ない平和の歴史を持っている。縄文文化が築いた1万年の平和、平安文化がもたらした350年、世界にまれな庶民文化を成熟させた江戸270年。長い平和の歴史を3度にわたって築けたのは、日本人が自然を畏敬

し、愛し続けてきたたまものである。

日本人の「自然を愛する心を原点とする美意識」は、東日本大震災の被災においても心が折れない東北人の我慢、忍耐、礼節、誠実さという強靱な存在感となり、世界の人々の心を捉えた。その美意識は、我が国民性への理解を広め、文化国家としてのイメージを高め、国際世論への説得力を増すことにもなった。

- 安倍総理から「広報センス」が重要な時代になったとお伺いしたとき、はたと膝を打った。「広報センス」とは、リオオリンピックの閉会式で、安倍総理をスーパーマリオとして登場させたあのセンスである。満場の観衆の心を捉えたばかりではなく、即座に世界に発信され多くの人々が好感を持って知るところとなった。

安倍総理は恒例を破り、大統領就任前のトランプ氏との電話会談において、世界の首脳としては初めての食事会の約束をされた。センスは重要な戦略ともなり得る実例である。豊かな経験から生み出されるアイデアや「広報センス」を持つプロを尊重する近代的なスタッフを、「日本の美」総合プロジェクトでは歓迎したい。

- 今年7月から行われたローマの仏像展は、イタリア文化省からの熱心な要望を受け、安倍総理がレンツィ首相と直接話し合われて実現に至った。イタリア国民が日本の仏像によって我が国の彫刻美術の価値を認め、これを尊敬にまで高め得たことは大成功だったと言える。ミケランジェロの専門家である、ボローニャ大学のミラーニ教授が、今回はぜひ、日本の仏師「運慶と慶派の作品」の仏像展を開催したいと申し入れてきたのがその証である。

文化外交においては、単発的な「点」の発信にとどまらず、これを「線」に結びつけ、コミュニケーションを持つことで「面」にまで広げることが大切である。人々の心に働きかける説得力を持った質の高い対話こそ、広報に文化的価値を与える。ぜひ、イタリア側の熱意ある提案に答えていただき、前回の強い印象を冷まさない2019年をめどに、ローマにおける「運慶展」の開催を考えていただきたい。

今回出展された仏像は、イタリア側が望んだものが少なく、期待に添えなかったことは、次回「運慶展」のためにも貴重な経験だった。お寺への説得や条件面での解決法を熟慮する必要がある。

イタリア側の学識者たちと日本側との意見交換の機会が少なかったことも反省点。次回「運慶展」実現の暁には、ミラーニ教授達にも当初から委員として御参加いただき、コミュニケーションを深めることが重要である。

今後の広報活動においては、日本の仏像彫刻がミケランジェロの国であるイタリア人からも尊敬の念をもって理解されたことなど、世界に誇る日本文化のすばらしさをもっと国民に伝える義務が我々にはある。

○2020年のオリンピック・パラリンピック時には、日本全国において、地方活性化につながる、長期間にわたっての大日本博の開催を提案する。国中に文化財、美術品、芸術的催しがあふれ返るお祭りとしながら、文化大国の真髄を發揮していただきたい。

2020年は、外国からの観光客の誘致が重要課題となる。日本の観光客数が伸びているとはいえ、2015年の世界ランクでは日本はまだ16位である。

観光立国の4条件は「文化」「食事」「自然」「気候」と言われるが、日本はその4条件を立派に備えている世界有数の観光大国である。同じ島国でも、イギリスの観光客数は、その条件を満たしていないにもかかわらず約3,500万人である。

トップのフランスは約8,500万人。本来なら日本は5,600万人の観光客が来ていてもおかしくないとの数値まで出ているほどで、いわば潜在力を生かし切れていないのが我が国の観光政策の現状ではないか。観光客誘致への努力の真価が問われる2020年大日本博でもある。

○ジャポニスム2018に続く国外での開催国は、情勢によってはモスクワ、アメリカならニューヨーク、アジアではシンガポールなども検討に値するのではないかと思う。

十分な準備期間を持つことが、国外における「日本博」開催の成功の鍵だと思っている。早期の御決定をお願いしたい。

【小林委員】

○ジャポニスム2018の企画に当たって、少し懸念するのは、国内においてもオリンピック・パラリンピックの2020年に向けて、既にさまざまな文化イベントが企画されており、それとの競合を調整する必要があるという点。例えば、琳派展などは、あちこちで企画が起きていると聞いている。

- 若沖については、動植綵絵という30点1セットの作品が宮内庁にあるが、これを以前、ワシントンのナショナル・ギャラリーで展示した。31日間で23万人余りの入場者があったとのことで、ナショナル・ギャラリーでも大変な記録とのこと。若沖を知らないというフランスの方がいるのは当然であるが、日本でも近年、再評価が始まったところであり、フランスでも、アメリカ以上の反響が期待できるのではないかと思う。
- しかし、宮内庁あるいは相国寺の仏画をまたお借りするのは大変御理解をいただかないと難しいと思う。2018年は2020年のオリンピック・パラリンピック直前なので、日本国内との調整を、官民一体となつて行う必要がある。

【内永委員】

- 企画がここまで進んでいることが分かりわくわくしているが、その中で思ったことがある。漆工芸の人間国宝の方がおっしゃっていたのだが、日本では「工芸美術」という言葉が、ヨーロッパに行くと「クラフト」と言われ、生活用具を意味するものになってしまう。このため、日本の工芸美術というのが正しく評価されていない。
- 特に、ヨーロッパやアメリカでは、美術品は美術品であり、生活で使うものがなおかつ美術品でもある、という発想がなかなかない。日本の工芸美術というものは、生活の中で使いながらそれ自身がすばらしい美術品になっている。
- 特に漆芸術は、漆材が他にはないことから東洋しかできない。ヨーロッパでは、黒の天然塗料はないのだが、日本には黒の漆がある。マリー・アントワネットは、どんな宝石よりも日本の漆工芸が大事だということで、たくさん集めていたそう。
- 聞いた話の中で一番心に刺さっているのは、日本はそういうものをビジネスにつなげるのがすごく下手だということ。例えば、焼き物でいうと、ヨーロッパでは、マイセンなど世界中に高い値段で陶磁器が出ているが、日本の焼き物は伊万里など、非常に限られている。また、これは事実かどうか分からないが、焼き物など工芸品は、中国や韓国では、10年前に30万円程度だったものが、今は3,000万円になっている。要するに、日本は、生活で使いながらも芸術品としてすばらしい価値のある工芸品を売るのが苦手だということ。

- だから、今回の取組が、芸術であり工芸でもある日本の工芸美術をビジネスとして世界に広げていくきっかけになればよいと思う。例えば刃物一つとってもゾーリングンが有名だが、日本の関だとか、使いながら美術品であり、その価値がすごく高いものが存在する。しかし、これは単にコストや人件費によって値段がつけられるのではない。
- 日本の需要だけではそうした職人さんを育てることは難しいが、世界に広げて多くの方々に買っていただければ職人さんも生活していけるようになる。そういう観点を少し入れられると、つくる方も気合いが入るのではないか。いいものがあるというだけではなく、いかにみんなに買ってもらうかという方向につなげられないか。
- 今回、大相撲の紹介はないのか。相撲は日本文化ではないか。

【津川座長（総括主査）】

- すごくお金がかかるようである。

【安藤国際交流基金理事長】

- 5億円とも言われている。

【内永委員】

- なぜ5億円もかかるのか。もう少し安くなる方法はないのか。

【津川座長（総括主査）】

- 人数が多いということが一つ大きな理由。

【安倍総理】

- 本当はやりたいところではある。1991年にロンドンで開催されたジャパンフェスティバルでもすごい人気だったのではないか。

【安藤国際交流基金理事長】

- そのとおりである。ただ、土俵を1つつくるにも大変。土をほかから持って来て固めなくてはならない。これだけでものすごくお金がかかる。

【宮田文化庁長官】

- 私は横綱審議委員だが安くはならない。全てが神事で行われているものだから、簡略化することはできない。外国用に簡略化して、逆に軽く見られることのほうが私は損失だと思う。
- 漆の話等々は、内永委員のおっしゃるとおりだと思う。4月に文化庁長官に就任してから気になっていることは、文化庁と経産省とで、同じようなことをやっているにもかかわらず、分離されてしまっているということ。これを一体化すれば、必ず経済と文化と観光と三輪車になるので、ジャポニズムをきっかけに発信していけば新しい経済効果が生まれる。尊敬される環境をつくれる気がする。これはぜひやりたいと思っている。

【津川座長（総括主査）】

- 聞いた話だが、漆に関しては、1万2000年前の縄文時代から発見されている。だから、漆も本当は世界最古なのである。

【内永委員】

- やはり日本の漆が一番強固。現在、日本産の漆では日本の需要を3%しかカバーできておらず、そのほとんどが中国産と聞いた。同じ成分ではあるが、塗った後での耐久性が日本のほうが高い。なぜ違うのかはまだわからないらしい。そういういろいろなことを、何とかビジネスにできないかと思う。

【幸田委員】

- 陶器が英語で「チャイナ」というのに対し、漆は「ジャパン」という。その辺りも象徴的だと思う。
- イタリア人の友人が先月の東北で起きた地震を心配してメールをくれたが、マグニチュード7.4の地震にもかかわらず、一人の犠牲者も出ていないことはすごいことだとあった。海外から日本は、非常に再評価されている。
- 日本人は自然をめでながら自然と共存してきた。世界で排他主義のような潮流の変化が起きている中、今回のジャポニズム2018を契機に、文化や芸術といった人類の基本的な共通認識の部分で共存や共栄という精神・哲学が相互

理解できれば本当に心強いことだと思う。

- ソフトパワーを高めていくことで国際間の相互理解を深めることが大切であり、このジャポニスム2018の重要度が増すと思う。いい企画案をつくっていただいて、日本人としてとても心強く、頼もしく思っている。
- 一つ思うのは、まだ準備段階だからだと思うが、国内での周知や認識がまだ成熟していないこと。メディアも含め、様々な場面で言える限りのことは申し上げているが、認知されていない。国内での意識を高める努力をこれから重点的に行っていく必要がある。この熱い熱をどうやって国内で共有し、ムーブメントにしていくかが一つのポイントだと思う。
- もう一つ、フランスの政情次第で、企画が振出しに戻ることがないよう、その辺りも視野に入れつつ対応していただきたい。

【林委員】

- 内永委員がおっしゃったことは、確かにそのとおりだと思う。日本のすごいところは、「アート」を普通に使って「クラフト」にしているところ。私は、雪華のお重箱を平気で普通に使っている。例えば、工芸品として展示するのではなく、工芸品の中に日本料理を入れて出すなど、複合的に考えることもできるのではないか。
- 日本では、おひな様の道具など、小さなものを極めて精緻につくる。クラフトをこうした芸術品に高める日本人の心やセンスというものも、今回ぜひ、展示していただきたい。明治維新150周年ということで、篤姫、和宮、など、姫君特集もやってほしいと思っている。

【宮田文化庁長官】

- 文化は、経済・観光と一体化されるものと思っている。先ほどの漆の話についても、現在あるものをいかに世界に知らしめるかということで大きな活力が生まれてくると思うし、私も実際、創作者としてそれをやらせていただいている。
- ジャポニスム2018。これは2020年の東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムの実施など、好条件が重なってきていると思うので、ぜひとも成功させていきたい。

○津川座長をはじめ、貴重な御提案・御議論を重ねていただいて、文化庁としてもしっかり努力していくので、よろしく御支援のほどをお願いしたい。

【内永委員】

○1つだけ提案がある。「クラフト」という言葉を使わない。この言葉は、「生活用品」というマインドがしみついているので、むしろ「工芸美術」とか「工芸品」をそのままアルファベットで書いて新しい言葉として定義したほうが、日本の工芸美術の位置関係がはっきりするのではないか。

【宮田文化庁長官】

○それはそのとおりで、もう動いている。

【内永委員】

○では、ジャポニスム2018の時には、「クラフト」という英語は使わないということで、お願いしたい。

【松野文部科学大臣】

○文部科学省でも、ジャポニスム2018に合わせて、2020年東京オリンピック・パラリンピックで海外からお客様をお迎えするに当たって、「日本博」を政府全体で取り組んでいる文化プログラムとしっかりと連携させていきたいと考えている。

○海外に日本文化を日本人が発信するには、まず日本人自身が日本文化のすばらしさを再認識することが重要だと思うので、2020年の「日本博」に向けての準備も含めて進めることで、日本人の日本に対する再認識が進むのではないかと期待をしている。

○日本ブランドを国外で高めることについては、全くそのとおりだと思う。引き続き、文科省としても積極的に議論に参加させていただきたい。

【安倍総理大臣】

○この会議をスタートし、最初は何をやるかとやや漠然としていたが、最終的には、この2018年のジャポニスムということで結実したと思っている。

- 先ほど安藤理事長から御紹介があったように、2018年まではあつという間である。非常に難しい状況ではあるが、安藤理事長をはじめ事務方の努力があり、また、フランス側にも非常に協力をいただいている。2018年に会場を確保するのは大変なことであるとのことだが、そこはしっかり協力しようということになっている。その中で、日仏の関係でお互いにやりたいということもあった。
- 同時に、フランス人は日本文化に対する知識の質量とも大変なものがある。日本文化は非常に多岐にわたっており、縄文からアニメまで、これほど広い範囲の文化的なソフトコンテンツを持っているのは日本だけではないかと思う。また日本には、「クラフト」ではなくて「工芸」という分野もあるということだった。
- 私の地元の長州藩がフランスと戦ったときに使っていた青銅製の大砲を、フランス側がその後、戦利品として持ち帰り、アンヴァリッドで展示をしていた。その青銅製の大砲はまさに彫刻である。フランス人は、「こんな美術品で戦っているから君たちは弱かったのだ」と言っていたそうだが、日本側は、これを何とか取り返そうとして交渉したが難しかった。父が外務大臣のときに、フランス側と交渉してお互いに貸し合うことになったが、彼らはこの大砲を貸してくれた。日本側からは毛利家の鎧を持っていったら、フランス側は、「西洋の鎧と違って、これは戦う道具ではなくて美術だ」と言って、非常に感動したと聞いた。
- 刀剣の話もあったが、美術品の高みに昇華させるところが日本のすばらしさではないのかと思う。まさに、日本のソフトパワー発揮の大いなるチャンスではないかと思うし、日本の技術の粋、美術のセンスの粋を発表していただきたいと思う。引き続きよろしくお願ひしたい。

4. 閉会

最後に、野上副長官より、次回日程等について以下のとおり説明があり、閉会となった。

- 本日いただいた大変貴重な御意見も踏まえながら、ジャポニスム2018の成功に向けて、政府一丸となって取り組んでまいりたい。引き続き、御指導のほどよろしくお願ひしたい。

○次回の会議については、委員の皆様の日程を調整させていただいた上で、改めて、御連絡をさせていただきます。

○本日の議論の内容については、ホームページに議事要旨を掲載させていただきます。

(了)